

日露間における COIL 型授業の実践¹

—京都外国語大学・モスクワ市立大学「日露共同授業」を例に—

菱川 邦俊

1. 京都という地の利を活かし、使えるロシア語を実践的に学ぶ

京都外国語大学（以下、本学）ロシア語学科では、学生がロシア語の使用を日常化させる環境で着実に語学力を高めていけるように「まいにちロシア語」をコンセプトに掲げている。授業では実践主体のアクティブラーニング方式を取り入れ、「聴く・読む・話す（やりとり）・話す（発表）・書く」の5領域を一体的に身につける語学習得プログラムを展開している。

1年次第2セメスターからは京都という地の利を活かした教室外での活動も授業に取り入れることになっている²。この教室外活動では、ロシアをはじめとするロシア語圏諸国から観光目的で京都等を訪れるロシア語話者や、在留ロシア語話者をサポートするボランティア通訳の実践を想定している。この高次の思考を伴う実践的な知的活動を初級レベルの段階から実施し、学生たちは問題発見力・問題解決力を身につけることをデザインしている。

2020年度にスタートしたロシア語学科では第2セメスターから、地域・社会貢献活動、交流サポーター事業を当初開始する計画であった。ところが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に伴い、人と人が一定時間以上接触する活動は制限を余儀なくされ、本学の授業も原則として遠隔授業で行われることになった。第2セメスターの授業では、ハイフレックス型（オンライン・対面同時進行）が一部で展開されるも遠隔授業が主流であった。

教室外活動をめぐってはロシア語学科教員の間で協議を重ね、コロナ禍では対面式のサポート活動は不可能であるとの結論に達した。そこで2020年度についてはその代案として、オンラインを活用した2つの活動を実施することになった。一つは日露交流の有識者を交えての「懇談型授業」、もう一つはロシアの交流協定大学との間で実施する「日露共同授業」である。

本稿ではとくに「日露共同授業」に焦点をあて、2020年度に本学ロシア語学科とモスクワ市立大学との間でオンラインを活用して実施した双方向国際協働学習 COIL

¹ 「日露共同授業」実施にあたり、本学施設管財課の種村旭紘氏、水谷美香氏には技術的なサポートを得た。ここに謝辞を述べたい。

² 該当科目は、必須の専攻語科目のうち「総合ロシア語Ⅱ」（1年次秋学期）、「総合ロシア語Ⅲ」（2年次春学期）、「総合ロシア語Ⅳ」（2年次秋学期）、「実践ロシア語演習Ⅰ」（3年次秋学期）、「実践ロシア語演習Ⅱ」（4年次秋学期）である。

(Collaborative Online International Learning) 型授業の取り組みについて、「日露共同授業」後に実施したレビュー授業ならびに学生へのアンケート結果をもとに実践報告をする³。

2. オンラインプラットフォームを活用した日露大学間交流

2020年度は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響を受け、国内外の諸大学でオンラインプラットフォームが急速に整備された一年であった。海外渡航が制限されたこともあり、オンラインを活用した新しい国際交流の形が模索された一年でもあった。

この一年を通して日露大学間のオンライン交流も各地で盛んに行われた。一例を挙げると、東北福祉大学とウラジオストク国立経済サービス大学は2020年6月に⁴、愛媛大学とオレンブルグ大学は2020年12月に⁵、稚内北星学園大学ではサハリンの学生との間で2021年2月に⁶、それぞれオンラインによる国際交流を実施した。札幌大学と北東連邦大学(ヤクーツク)の間では2020年9月に、札幌大学オープンキャンパスの体験授業で Skype を使用して現地大学と結び日本語専攻の学生や同大学から留学中の日本人学生と交流するというオンライン体験授業を行っている⁷。また、フォーラムを開催した大学もあり、近畿大学がロシアの交流協定大学との間で「近大・ロシアものづくり学生フォーラム」を2021年2月に実施している⁸。そのほか、関西大学は極東連邦大学(ウラジオストク)との間でビデオコミュニケーションサービス「Flipgrid」を用いたオンライン相互学習を実践し⁹、信州大学とノヴォシビルスク国立大学¹⁰、日

³ レビュー授業と学生へのアンケートは本学のみで実施した。したがって、本稿では本学学生に関する内容を扱う。

⁴ 「オンライン国際交流を実施」(東北福祉大学ホームページ)

<https://www.tfu.ac.jp/kokusai/s9n3gg000000v5lg.html> (2021.2.28 最終閲覧)

⁵ 「ロシアの協定校オレンブルグ大学とオンライン国際プログラムを実施しました」(愛媛大学ホームページ) <https://www.ehime-u.ac.jp/post-141718/> (2021.2.28 最終閲覧)

⁶ 「サハリン(ロシア)の学生とオンライン交流をしました」(稚内北星学園大学ホームページ)

<https://www.wakhok.ac.jp/archives/10019> (2021.2.28 最終閲覧)

⁷ 「ロシア語専攻が海外とのオンライン授業体験を行いました」(札幌大学ホームページ)

<https://www.sapporo-u.ac.jp/news/international/2018/10043215.html> (2021.2.28 最終閲覧)

⁸ 「『近大・ロシアものづくり学生フォーラム』をオンライン開催 近大モノづくり工房が開発した“近大マスク”を通して国際交流」(NESCAST) <https://newscast.jp/news/6399050> (2021.2.28 最終閲覧)

⁹ ロシア語教育研究集会2020(日本ロシア語教育研究会)および日本外国語教育推進機構

(JACTFL)における口頭発表より <http://rokyoken.web.fc2.com/activity.html> および

<https://www.jactfl.or.jp/wdps/wp-content/uploads/2021/02/JACTFL9Sympo1-4Kitaoka.pdf> (2021.3.13 最終閲覧)

¹⁰ 「共通教育科目「グローバル人材論」でノヴォシビルスク大学(ロシア)との共同オンライン授業(COIL)を実施」(信州大学グローバル化推進センターホームページ) <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/gec/globaleducation/news/2020/11/coil.php> (2021.2.28 最終閲覧)

本大学とロシアキリスト教アカデミー付属カレッジ(サンクトペテルブルク), 高等経済大学(サンクトペテルブルク)¹¹がそれぞれ COIL 型授業を実施している。本学ロシア語学科では「総合ロシア語」の授業の一環として, 交流協定大学であるモスクワ市立大学との間で「日露共同授業」を行った。次節以降では「日露共同授業」の具体的な取り組みを紹介する。

3. 「京都外国語大学・モスクワ市立大学 日露共同授業」の概要

「日露共同授業」はコロナ禍の影響で教室外活動の実施が不可能となり, その代替措置として「総合ロシア語」の授業の一環でオンラインを通じて実施されたものである。当該授業は, 本学とモスクワ市立大学の学生が5つのテーマに関して協働作業を行い, 最終的には各テーマに関するプレゼンテーションをオンライン上で行うという内容であった。オンラインプラットフォームとしては, 両大学が採用している Microsoft Teams (以下, Teams) を利用した。本学からは「総合ロシア語」を履修する1年生22名が, モスクワ市立大学からは日本語学科日本語学専攻の3年生17名が参加した。担当教員としてはモスクワ市立大学日本語学科のグリゴリー・ミソチコ准教授と筆者が「日露共同授業」に加わった。

オンラインを活用した共同授業, いわゆる COIL 型授業のあり方は, Skype や Teams, Zoom, Cisco Webex 等のオンラインプラットフォームを利用した会話交流, テーマを決めたディスカッション型交流, 課題解決型のプロジェクトなど様々な形態が考えられる。「日露共同授業」を実施するにあたっては教員間で複数回やり取りをし, 4節で紹介する期待される学習効果を念頭に「日露共同授業」の概要を策定した。学生のプレゼンテーションテーマについては, (1) コロナ禍における学生の日・平日編, (2) コロナ禍における学生の日・休日編, (3) コロナ禍における日露アルバイト事情, (4) 日露若者ことば比較考, (5) 日露サブカルチャー事情の5つを設定し, どのテーマにコミットするか学生にアンケートを取りながらグループ分けを行った。Teams は双方の大学でプラットフォーム上を相互乗り入れしながら使うことが技術的にできないことが判明し, 本学のオンラインプラットフォームを利用することになった。ロシア側参加者には本学ユーザーIDを取得し, 本学の Teams 上に「日露共同授業」のチームを立ち上げ, テーマごとのグループ作業用チャンネルを開設し, 参加者の登録を行った。

協働作業を学生が進めていく中で問題が生じる場合を想定し, Teams のチャット機能やメールで教員と常にコンタクトを取ることができる環境を用意したが, なるべく学生たちの自主的活動を促すために教員は進捗状況を確認するにとどめ, 学生たちの

¹¹ 「ロシアの大学と合同オンライン授業」(ソコロワ山下聖美文芸研究室ホームページ)
<https://yamashita-kiyomi.net/?p=3646> (2021. 2. 28 最終閲覧)

協働作業には極力介入しないということを事前に申し合わせた。また、協働作業実施期間中の授業後、あるいはオフィスアワー等で学生からの相談に応じた。

今回の協働作業では、時差や意思疎通を図る共通言語への配慮をしつつ、見知らぬ学生がお互いに Teams 上のチャット機能からコンタクトを取り合い、Teams や SNS 等のツールを活用して授業内外で一緒に遂行するところからスタートした。

協働作業を遂行するために教員側が設定した条件は以下の5点のみであった。

1. 「日露共同授業」実施日まで準備期間を約 20 日間とし、テーマごとに5つのグループに分かれて、発表資料と原稿を作成する。
2. 発表原稿は、日本人はロシア語で、ロシア人は日本語で作成する。
3. 発表資料の言語については、各グループの判断に委ねる。
4. 各グループで話し合い、調整役となるグループリーダーを1名ずつ選出する。
5. 当日の発表時間は1グループ10分とする。

4. 協働作業で期待される学習効果と学生たちの学び

4. 1. 期待される学習効果

「日露共同授業」を実施するにあたっては、コミュニケーション能力の向上、相互理解、ピアインストラクション（教え合い）の実践等をキーワードに次のような学習効果を想定した。

- 1) 高次の思考を伴う知的活動をごく初級レベルから言語学習に組み込み、学習言語におけるコミュニケーション能力を高める
- 2) 日露双方に関わるアクチュアルなテーマを取り上げ、双方の協働作業を通じてディスカッションをし、お互いの理解を深める
- 3) それぞれの学習言語で最終発表（プレゼンテーション）を行うため、協働作業の中でお互いに教え合い、実践的な学びを成立させる

本節では、「日露共同授業」後に実施したレビュー授業ならびに学生へのアンケート結果から学生たちの取り組みを浮き彫りにし、期待される学習効果と学生たちの実際の学びを検証する。

4. 2. 協働作業を通じた学生たちの学び

協働作業は双方が Teams のチャット機能を使ってコンタクトを取るところから始まった。この時点でスムーズにコンタクトを取り合うことができたグループと発表直前までロシア側との連携がうまくいかなかったグループが存在した。早くからコンタクトを取り合えたグループの中には、ロシア側メンバーとは Teams を使い連絡を取り合いながら日時を決めて協働作業を行い、日本側メンバーとは Line を使い発表資料作りを同時に行うなどそれぞれに合ったオンラインプラットフォームを使い分けて円滑に作業を進めたグループがみられた。その一方で双方の時間が合わずに発表直前になっ

てようやくコンタクトをとることができたグループもあった。ロシア側メンバーとのやり取りに苦戦しただけではなく、日本側メンバー内のコミュニケーション不足で進捗の遅れたグループも散見された。

協働作業では、テーマに関するお互いの意見交換・ディスカッション、発表資料や発表原稿の添削がそれぞれのグループで行われた。作成した双方の発表資料を見ながら意見交換をし、お互いの発表内容を練り上げたグループ、双方で原稿を添削し合い、添削した原稿をもとに発表に向けて練習を重ねたグループ等があった。グループ全員で役割を決めて協働作業に取り組み、プレゼンテーションをスムーズに進めることが可能となったグループがある一方で、グループ内での役割分担がスムーズに行かず一部のメンバーに大きな負荷がかかったグループもみられた。前者グループのアンケートからは「全員で話し合いをするまでの間、進める手順を自問自答し続け、話し合い自体も計画的に進めた」リーダーの姿があり、そのグループ構成員からは「リーダーのみに大きな負担をかけないよう、グループ内で意見を述べることに心がけた」、「話し合いのとき自分の意見を積極的に言って、リーダーに頼りすぎないようにした」といった建設的な意見がみられ、お互いのことを気遣いながら作業を進めていくチームワークの良さが垣間見られた。後者グループからは「日本人メンバーは発表の3、4日前になるまで連絡しても既読無視の状態だったのでどうすることもできず、不安で仕方なかった」リーダーの姿とともに、「ほとんどリーダーに作業を任せっきりになってしまった」との意見がみられ、一部のメンバー任せでチームへの貢献度の低いフリーライダーが出現していた様子が窺えた¹²。

ところで、日露間でプロジェクトを遂行する際に必ず考慮しなければならないことの一つに時差の問題がある。日本に隣接するウラジオストクやサハリン等では日本時間+1時間、ノヴォシビルスクでは日本時間-2時間、モスクワやサンクトペテルブルクでは日本時間-6時間である。オンラインでロシアの学生とやり取りする際には時差の問題が当然起こってくる。この「日露共同授業」の取り組みでは、モスクワとの6時間ある時差を意識し考慮に入れながら、いかに効果的に作業を進めていくか、言語外現実にも目を向け語学力の向上だけではない一面を学生が体験し、そこから学ぶ契機となることも期待した。「時差の関係でロシア人メンバーとの連絡が毎回1日おきになり、時間が合わないところが苦勞した」、「日本側とロシア側の打ち合わせの時間が合わないことが気になった。時差の問題もあるが、本番の2、3日前に1回打ち合わせただけだった」、「時差の関係もあり、ロシアの学生は日本の夜中に返信してくれる事が多く、こちら側が夜中起きて作業していた」と時差を考慮した活動の難しさを体験できたようである。

¹² 松下(2015:7)は、グループ内での分業が許容される程度をこえて不均衡になると、フリーライダーの出現を許してしまうことがあると指摘する。

4. 3. 協働作業を通して期待される学習効果はみられたか

では、「日露共同授業」を実施するにあたって教員側が想定した学習効果はみられたであろうか。

ごく初級レベルの言語運用能力で高次の思考を伴う知的活動を実践し、学習言語におけるコミュニケーション能力を高めることはできたか。レビュー授業ならびに学生へのアンケート結果からは次のような学生像が浮かび上がってきた。ロシア側学生とコミュニケーションをするにあたって「どうすれば誤解なく伝えられるか、言葉選びの難しさ」を実感した学生、「習った構文や単語を使っていざうまく話そうとしても、なかなか出てこない場面が多々」あり、もどかしさを体験した学生がいた。初修言語を使っての活動に苦勞した学生がいた一方で、「ロシア人に言葉が伝わり」喜びを感じた学生、「自分のロシア語が通じた時とても嬉しく、繋がった気がした。まだあまりロシア語を話せずに不安な気持ちばかりだが、またこのような活動をしたと思った」学生など手応えを感じた学生もみられた。

協働作業の中でお互いに教え合い、実践的な学びを成立させることはできたか。相手の日本語原稿の校正・添削作業を通じて、「文構造の差や、今まで気にしたことがなかった日本語の格助詞の間違いなどを発見し、ロシア人の言語感覚を肌身で感じる事ができた」学生、「普段雰囲気日本語を話している分、言葉にして説明するのが難しかった。調べることで正しい日本語を学ぶことができた」と相手を通じて自らの言語活動を振り返る機会を得た学生、相手の書いた日本語文章を読み、「どこまで自然な日本語に直せば良いのか悩んだ」学生など、気づきの多いピアインストラクションの場となったことが窺える。さらに、相手に自分たちが書いたロシア語の文章を添削してもらうことで、「今まで知らなかった単語や表現に出会うことができ、とても勉強になった」学生、「ロシア語を勉強している中で身近に添削をしてもらえる人がいるととても心強」く感じた学生など、双方の間で実践的な学びが成立していた様子が浮かび上がった。

さらに、協働作業を通じたディスカッションの中でお互いの理解は深まったのだろうか。グループ活動が不十分で「準備期間開始時からロシア側との連絡が取れていればさらなる交流が期待できた」とするグループもあったようだが、学生のコメントからは次のような意見がみられた。

「お互いに話し合う中で知らない文化を知ることができてよかった」、「この協働作業を通してロシアの様々な事情や文化を知ることができた。とくに若者言葉のプレゼンは興味深く、語彙も増やすことができた。ロシアと日本ではやはりいろいろな文化の違いがあるのだと思ったが、意外と似ている点や共感できる点もあったので少し親近感が湧いた。またロシア側の学生も意外とシャイな人が多いのだなと感じた」、「ロシアの現状を知ることが出来、とても興味深かった」、「ロシア人学生がフレンドリーだった」、「ロシアと少しだが、つながることができてよかった」、「もっとロシアの方々

と繋がりたい」, 「オンラインだからこそその交流ではあるが, 実際に会ってみたい」.

学生たちの反応からは, 日ごろの授業で抽象化していたロシアを, 時空間を超えた協働作業という取り組みを通じて具体化し, 身近に捉えることができたことが窺え, 一定の効果がみられたと言えるだろう.

5. 「日露共同授業」成果発表会

5. 1. 成果発表会の概要

オンラインプラットフォームを活用した「日露共同授業」は, 授業時間以外での協働作業, プレゼンテーションを中心とする成果発表会, 前者取り組みのレビュー授業から成り立っている. 本節では成果発表会について学生の反応とともに紹介する.

5. 2. 成果発表会における学生たちのプレゼンテーション

成果発表会を中心とする「日露共同授業」は 2020 年 11 月 12 日 (木) 日本時間 19 時から 21 時 (モスクワ時間 13 時から 15 時) に実施された. 授業時の共通言語は日本語とし, グループ発表と自己紹介については, 日本側学生はロシア語で, ロシア側学生は日本語で行った.

「コロナ禍における学生の一日・平日編」では, 日露それぞれの視点から, 一人暮らし, 実家の学生それぞれからの観点から考察し, オンライン授業への参加, ソーシャルディスタンスの取り組みなどが紹介された.

「コロナ禍における学生の一日・休日編」では, 休日をどのように過ごしているか双方の学生に事前アンケートを実施し, その集計結果をベースに日本とロシアの比較が発表された.

「コロナ禍における日露アルバイト事情」は, コロナ禍の下で学生アルバイトがどのように変わったか, その業務形態や業種の観点から考察された内容となっている.

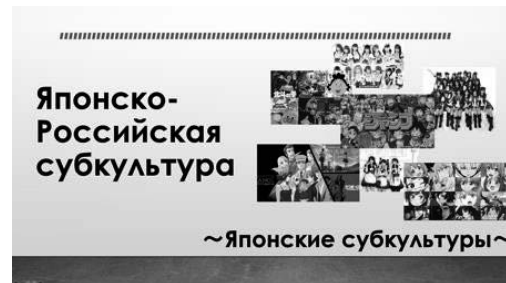
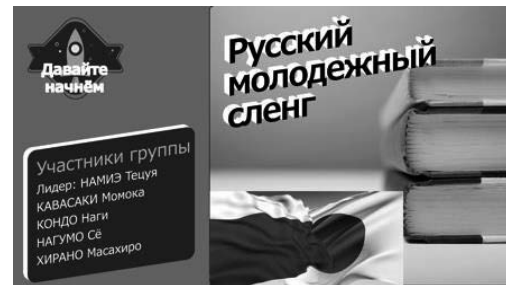
「日露若者ことば比較考」では, 日本側がロシア語の若者ことばを, ロシア側が日



本語の若者ことばについてそれぞれの言語でのニュアンスを調べて紹介した。

「日露サブカルチャー事情」では、両国の若者が関心を寄せるサブカルチャー文化について、どのようなジャンルがあるのかが取り上げられた。

プレゼンテーションの作成にあたっては、学生に対して条件を教員側であらかじめ設けなかったことで、学生たちが創意工夫を凝らしたプレゼンテーションを作り上げることができたと言える。「発表するにあたって細かいルールなどがなかったのは良かったと思う。自由度の高いユニークな作品が見られているんな面で勉強になった」、「日本側、ロシア側だけでまとめて発表するところと、まさしく日露合同で発表するところがあったが、日露合同でプレゼンテーションを作成したグループの発表は大変わかりやすく段取りが取れていて、同じことをその場で日本語、ロシア語で発表するというのはよいことだと思った。（発表のやり方に）正解がない分、よりクリエイティブなものになったのではないか」との感想がみられた。



6. 「日露共同授業」を終えて

「日露共同授業」の最後には本学学生を対象にレビュー授業を行い、一連の「日露共同授業」の活動を振り返った。今回の「日露共同授業」に関して、協働作業というピアインストラクションの場を通じて「プレゼンテーションの練習の時にお互いの原稿や資料で間違っているところを直し合うことができ、十分な交流ができた」、「ロシア語の基礎がそもそもできていない中で文法に不安がありながらも、いろいろな人からアドバイスをもらってなんとか無事に終わることができたことに達成感を抱いた」、「ロシアの方々と一緒に準備していた時間はとても充実したものだだった」等の前向きな意見が聞かれた。さらには、「今回は数人でのグループ活動だったが、いつかロシア人学生とのペアワークなどもできたら面白いなと思っている」と、さらなる発展的活動を期待する声も聞かれた。

「日露共同授業」を終えてから行ったアンケートでは、参加してよかったと回答し

た学生が 90%を占め、よくなかった (5%), わからない (5%) を大きく上回った。

「日露共同授業はお互いにいい経験になるものだった」、「全体を通していい経験だった、もっと話してみたい、知りたい」、「この共同授業でロシアにもっと興味が湧いた」等の好意的な意見が寄せられ、今回の「日露共同授業」が学生たちの成長に一定の役割を果たしたと思われる。

その一方で改善すべき点も浮き上がってきた。「日露共同授業」の学生プレゼンテーションでは、日本側の発表はプレゼン資料を含めて全てロシア語で行い、ロシア側は日本語で行った。このことにより「いろいろな内容の発表がありとても面白かったが、専門的な内容の発表となったため、ロシア語で発表をしていた他の日本側グループの発表内容がほとんどわからなかった」、つまり、自分たちの発表以外は理解できなかったとの意見もあった。今後このような共同授業を展開する際には双方の語学運用能力への配慮と工夫も必要であろう。

限られた時間の中でオンラインという物理的制約のもと、教員側で予めテーマを設定し学生に提示したが、「今回与えられたテーマも面白い内容だったが、テーマを自身たちで決めることができればまた違った発表が見られたのかもしれない」との意見もみられた。

今回の授業では学生のプレゼンテーションにおいて制限時間をオーバーするところが多発し、同じグループ以外の学生同士が交流する時間を持つことができなかった。「グループ内外のモスクワの学生と交流ができたならよかった」との意見も聞かれた。これらの点に関しては、今後の課題として残った。

本稿を執筆している 2021 年 3 月現在、災禍が近いうちに収束するかどうかは未知数である。留学に関しては「海外渡航制限の長期化を鑑みると、今後は留学の代替として、オンラインとオフラインの組み合わせによるブレンド型学習 (Blended Learning) や、『対面学習と非同期型オンライン学習を組み合わせた (山内: 2020)』ハイブリッド学習 (Hybrid Learning) が増えることが想定」されるとの見方もある (中村: 2020)。本学においても 2021 年 3 月にロシア語学習者を対象とするオンライン短期留学プログラムが実施された¹³。2021 年度については学生の教室外活動が京都の地で実施可能かは未だ不確定なところである。そのような中でオンラインを活用した国際協働学習 (COIL 型) による授業の展開は今後の一つの「学び」のあり方を示しているのではなかろうか。

¹³ 当該オンライン短期留学は「KUFS インターンシップオンラインプログラム～Russian Language Speaking Course」の名称で、ノヴォシビルスク国立大学との間で Skype を用いて実施された。合計 30 時間 (1 日 3 時間, 週 5 日, 2 週間) のプログラムで修了証が発行された学生については 2 単位が付与された。

参考文献

- 中村絵里 (2020) : 「日本の高等教育における留学促進と ESD 受容に関する考察」
“Working Paper Series in United Nations University Project “Reinforcing Societal Resilience by Promoting Education for Sustainable Development (ESD)” ”
October, 2020 No.2, 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター.
<https://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2020/10/0a80985eeb99b30ab04dfa09bd7c512e.pdf>
(最終閲覧 2021.02.28)
- 松下佳代 (2015) : 『ディープ・アクティブラーニング』 勁草書房.
- 山内佑平 (2020) : 「オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド学習」『東京大学大学院情報学環・学際情報学府 山内佑平研究室 BLOG』.
<https://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2020/07/post-22.html>
(最終閲覧 2021.02.28)